

## 長野県総合計画審議会議事録

1 日 時：平成 19 年（2007 年）5 月 8 日（火）午前 10 時から 12 時まで

2 場 所：長野県庁 西庁舎 3 階 災害対策本部室

3 出席者

委員：小宮山淳会長、有吉美知子委員、池田こみち委員、伊藤かおる委員、近藤光委員、  
滝澤修一委員、平尾勇委員、細川佳代子委員、松下重雄委員、若林甫汎委員、鷺澤  
正一委員

専門委員：遠藤守信専門委員、北原曜専門委員、花岡勝明専門委員

長野県：企画局長 和田恭良、企画課長 岩崎弘、政策評価課長 原山隆一、企画課企画  
幹兼課長補佐 佐藤則之ほか

4 議事録

（進行：企画課 佐藤企画幹）

お待たせいたしました。ただいまから、長野県総合計画審議会を開会いたします。

私は、本日の議事に入るまでの間、進行を務めます、企画課の佐藤則之です。よろしく  
お願いいたします。

最初に、出席状況についてご報告いたします。本日、太田哲郎委員、藤森照信委員、藤  
原忠彦委員及び古田睦美委員は所用のため欠席する旨の連絡がございます。細川委員さん  
はご出席予定でございますが、少し遅れている模様でございます。そのほかの 10 名の皆様  
にご出席をいただいておりますので、本審議会条例第 6 条の規定によりまして、会議が成  
立しております。

また、専門委員の皆様につきましては、本日は、樋口一清専門委員、松永哲也専門委員、  
横道清孝専門委員の 3 名の方が欠席されておりました、ほかの 3 名の皆様にご出席をいた  
だいております。

ここで委員の異動がございましたので、ご報告を申し上げます。矢崎和広委員が去る 4  
月 13 日をもって退任され、鷺澤正一様に後任の委員をお願いいたしております。ご紹介い  
たします。

次に、資料の確認をいたします。お手元の配布資料一覧をご覧ください。お配りしまし  
た資料を事前にお送りしてありますものも含めましてご説明をいたします。

まず資料 1、総合計画策定日程（案）でございます。資料 2-1、審議事項（案）でござ  
います。資料 2-2、構成イメージ「論点整理」時点、これにつきましては、申し訳ご  
ざいませませんが差替えをお願いいたします。それから資料 3、論点整理たたき台でございま  
す。正誤表をお手元に用意いたしました。よろしく申し上げます。それから資料 4、ご意  
見・ご提言の（2）、これは送付済みでございます。それから資料 5、主な意見・提言、こ  
れもご送付済みでございます。それから、地域懇談会の開催について、が資料 6 でござい  
ます。本日、別紙 1 の委員さんの名簿を付けた日程を、追加でお示ししてございます。そ  
れから資料 7、着実な推進を図るために（案）、これも送付済みでございます。

以上でございますが、何か不足するものがございましたら係の者まで申し出いただけれ  
ばと思います。

また、本日の参考としましては、平成 18 年度県民満足度等調査結果～平成 14 年度調査

との比較～がひとつ、長野県の既存・新規計画等一覧がひとつ、最後に少子化に関する県民意識調査結果概要と、その報告書全文をお配りしてございます。よろしゅうございますでしょうか。

次に一点、マイクの操作方法についてご説明をさせていただきます。発言の際は、マイク台の中央にありますスイッチを押してからご発言をいただきますようお願い申し上げます。そして終了後は、スイッチを切っていただきますようお願い申し上げます。

それでは、これより議事に入りたいと思います。当審議会の議長は、会長が務めることとなっておりますので、小宮山会長さん、よろしくお願ひいたします。

(小宮山会長)

委員各位には、ご多用の中をご出席くださいます、誠にありがとうございます。

前回の議論や委員各位、また県民、市町村長の皆様方の意見をベースに、私のところで論点を整理いたしました。本日はひとつのたたき台として作成したものをお手元にお届けしてございます。この資料につきましては、後ほど事務方から説明をいただきまして、ご審議をいただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、会議事項に入ります前に、会長の職務代理者の指名をお願いしたいと思ひます。先ほど事務局から報告がございましたが、会長の職務代理者をお願いしておりました矢崎和広委員が退任されましたので、本審議会条例第5条第3項の規定によりまして、会長の職務代理者を指名させていただきたいと思ひます。鷲澤正一委員を指名させていただきますので、どうかよろしくお願ひいたします。

それでは、会議事項に入りたいと思ひます。本日の議題は、長野県中期総合計画（仮称）の策定について、この論点整理でございます。最初に、資料につきまして事務局から説明をお願いしたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

(岩崎企画課長)

(資料1から資料5に基づき説明)

(小宮山会長)

ありがとうございました。

今日ご議論をいただくたたき台として、お手元の、今、ご説明をいただいたような資料を作成してございます。今日は、これを基にいろいろなご意見をいただきたいと思ひますし、またご審議をいただきたいと思ひます。くどくなりますが、あくまでもたたき台でございまして、どうぞいろいろなご意見をいただきたいと思ひます。

今日、特にご議論いただきたい中身は、先ほどご説明がございましたように、これからの県づくりの基本的な視点、それから基本目標についてもご意見をいただけたらありがたいと思ひます。それから、もうひとつ大事なのが計画の施策体系、柱立てでございまして。現在は5本にしてございますが、別に五つに固執するつもりもございませんので、新たに加える、これとこれを分けるとか、あるいはこの表現をこうする、なんでも結構ですので、今日はいろいろご意見をいただいて少し集約していきたいと思ひしております。遠慮なくご意見をいただきたいと思ひます。どうぞ、お願ひします。

(北原曜専門委員)

的外れな意見かもしれませんが、少し気になりましたのは、計画の基本方向のグローバル化のところ少し触れていたり、所々で触れていますが、地球温暖化の防止というのが非常に薄いような気がします。

と申しますのは、いただいた県民満足度等調査報告書でも、非常に重要度が高いもののトップに地球温暖化の防止が入っています。また逆にですね、一番満足してない項目として地球温暖化の防止が入っています。

地球温暖化の防止というのは世界レベル、国レベルの話ですから、なかなか県の施策としてはやりにくい、具体例を出しにくい面があると思います。しかし、この、さわやかな、自然の豊かな長野県のイメージとして、地球温暖化防止に積極的、あるいは温暖化防止先進県として、イメージを高めていくというのが非常に重要なことだと思います。

実際、地球温暖化のダメージとしては、自然、特に高山帯などが破壊されていきますから、災害も多くなりますし、もちろん観光などいろいろな面に影響してくるわけです。ということで、地球温暖化防止の具体的な施策も含めて、省エネだとかエコだとか、行政改革なども含めてですけれども、そういうものを目標の一つに立ててもいいという気はしています。

というのは、資料5の意見・提言の中で、地球温暖化防止対策に関して、数値目標を中期総合計画に盛り込むべきという意見が出ています。このへんも含めてですね、もう少し地球温暖化に対して県が何ができるのか。これを県の売りとして持っていくことができるのかということ、少し議論してみてもいいのではないかと思います。

(池田委員)

先回はお休みして失礼いたしました。

ただ今のご意見ですけれども、ほかの項目でも言えると思いますが、今日、参考で配られている県のほかの計画がございます。地球温暖化に関しては、環境審議会温暖化防止のための計画を作って既に動かしています。環境審議会の中では、せっかく作っているのにその普及や県民の認知度、市町村の取組がまだ不十分なので、県はそれをもっと普及すべきだというような意見も出ています。ほかの個別計画がこれだけあるわけですから、今回の総合計画が個別計画の見直しに際して、「総合計画でこういうことがうたわれているから、それに合うように見直さなければ」というような影響力を持つものとして作られなければいけないということが非常に重要で、「それはもう個別計画で言っているから、総合計画は単にホッチキスで留めただけ」というような、軽視されるものにならないために、どこまでうたい、どこまで個別に細かく指摘するのかという、そのへんのバランスが非常に難しいと思います。

そこで、今おっしゃられた地球温暖化に関しては、県民の要望も強いし不満足度も高いということで、既に作っている温暖化防止計画をもっと徹底的に長野県として推進していくということを、ここに入れることは非常に重要だと思いますが、それぞれのものについて、どこまで案配していくかというのは、非常に難しい問題だと思っています。

(小宮山会長)

これは、非常に大事なことだと思いますので、もう少しご意見をいただけないでしょうか。もうひとつ、これに関してテーマを設定して取り組む施策というのがございます。このへんとの絡みも出てくると思います。いずれにしてもこれは非常に重要なことだと思いますので、何らかの形で総合計画にも、その精神を盛り込んでいきたいとは思いますが、どうでしょうか。

(伊藤委員)

今の地球温暖化の問題もそうですが、施策体系の中で地域を支える力強い産業づくりがうたわれていますが、やはりそういうものを進めていった先に、環境への問題が発生したり、あるいは労働関係の問題もそうだと思います。環境配慮型企業というような、そういうバランスも必要だと思うので、そういう意味で今のそれぞれの委員のご発言にあった地球温暖化防止先進県というところに、企業もそれを視野に入れた力強い産業づくりというような両輪で考えていく部分というのは、視点として盛り込まれる必要があるのではないかと考えます。

(池田委員)

最初から申し上げていましたが、資料3の43ページの体系図ですが、環境というのが五つの柱の一つに入っているわけですが、環境が横並びのほかのものと同じでなくて、ひとつ上のランクにくるといような体系にすると、非常に新しさが出ると思います。環境が横断的にあって、その下に今おっしゃった産業ですとか、インフラの整備ですとか、個別のものが全部位置付けられていると、長野は地球温暖化を含めた環境がベースになってすべてのことが動くというのが明確に見えて分かりやすく、それがフレーム上のひとつの特徴になると思います。

(松下委員)

私も同様に思いますが、これまで私の発言がそれに関して少し弱かったものですから、少し補強して発言させてもらいます。今、池田先生が言われたのと同様に私も長野県の場合、恵まれた自然とか豊かな自然、あるいはたぐいまれな自然、あるいは美しい景観、もっと言えば長い伝統とか、歴史にはぐくまれた文化、そういったものが基本理念の最上位にくるべきものだと考えています。

経済の活性化、産業振興、この必要性は十分分かりますし、そのとおりだと思います。環境については、資料2-2の計画の施策体系の一番下、5番のところに初めて「豊かな自然環境の保全と美しいふるさとづくり」といような形で出てくるわけですが、これはやはり基本理念の最上位に据えたほうが、一番初めの北原委員さんの発言ともマッチしてきますし、やはりこういったことは、あえて戦略としてでも打ち出す必要があると思います。それを分かりやすく、少し分量を多くして今回の基本理念として据える、これが今回の中期総合計画の大事なことではないかと思っています。以上です。

(北原専門委員)

全く賛成です。というのは、この43ページの施策体系を見ていますと、1から4まではどこの県も同じという感じがします。総花的といいますか、普遍的といいますか、そういう感じです。やはり長野県らしさを出すためには自然環境の保全だとか、温暖化に関することを全面にもっと押し出したほうがよろしいのではないかと思います。

(遠藤専門委員)

今までのご議論、大変賛成です。実は宇宙から見た世界の夜景というのが、今、非常にブームになっています。そこで日本列島の中で真っ暗な部分を探すと、長野県とぴったり一致します。東京とか名古屋、大阪は、もう明るく輝いています。10年前からこういうデータが出始めましたが、それを見て「長野県って遅れているな」と私は少し悲しむことがありましたが、最近は真っ暗でうれしい。要するに、夜中が真っ暗ということは、豊かな森があるということです。長野県のこの森を保つと県民がみんな意識していくと、環境県長野と大きくアピールできます。

一方、同じ森を世界で探すと、アマゾン流域も真っ暗な地域です。ところが夜、赤い光がぼんぼん最近見えだした。これは、エタノール経済ではありませんが、森を切り開いて、そして倒木をし、ジャングルを焼き払っています。

でも長野はそういうことはない。鷺澤市長さんたちが進めていらっしゃるように、善光寺のすばらしい檜皮葺き(ひわだぶき)を50年後に残そう、木を一本も切らずに、森を造ろうという意識が県民の中に生まれています。つまり、この環境先進的な認識を県民が持つことによって、地方に新しい時代を開けると思います。

しかし、28ページのところに「時代の潮流を見つめ」と書いてありますが、こうすると、世の中がどう流れているから、それに長野県をどうやって合わせていこうかという、少し消極的な雰囲気が見えます。そうではなくて、やはり新しい時代を長野県が開くという意気込みをここへ入れてほしい。つまり、日本のどこもやっていないけれども、環境についてはそのすばらしい自然を長野県が全国的に持っている。この自然を保全しながら、その環境マインドを高めて、苦痛に耐えるという意味ではなくて、豊かな生活をしながら、CO2の排出を抑えていくような、新しい21世紀型の県民を養成していく、あるいはそういう経済を作り出す、こういう先進県を高らかにうたうというのが、僕は今、非常に大事ではないかと思います。

北原委員がおっしゃられたような、地球温暖化防止、環境時代に切り開く長野県民というコンセプトを是非盛り込んでほしいと思います。

(鷺澤委員)

この件については矢崎前委員さんとの引継をしていないものですから、違う話になってしまうかもしれませんが、私は環境対策ということを入れることについての今までのご意見については、すべて当然だろうと思います。ただ、これは行政がやるのだから仕方がないと言えば仕方がないのですが、この計画全体を見た場合にどうしても総花的になってしまう。また、総花的にしなければ県の施策としては不公平になるというような意味合いがどうしてもあります。これは市政でも同じで、ある程度は仕方がないことだとは思っていますが、確かにその中でもこの環境というものに力を入れるということは基本的に大事だ

ろうと思っています。

それと合わせて、長野県のもうひとつの特徴である中山間地域をどうするのかという問題が、実は全くこの中では触れられていません。これも日本全体の問題で、今のところ解決方法を日本中持っていないと思っていますが、長野県の地域、面積的でいうと、おそらく80か90パーセント近くになるのではないかと思います。この地域をどうするのかという視点が、ここに何も入っていないのではないかなと思います。もちろん、個々の問題に、例えば一番最後の、「豊かな自然環境の保全と美しいふるさとづくり」の中にも、「循環型社会の形成」とかあるいは「美しい景観」などいろいろなことが書いてありますけれども。

私は、基本的にはその地域に人が住んで食べていけない限り、うまくいくはずがないと思っています。人が全くいない方がいいかどうかという問題ですけど、私はやはり、人がそこに住まなければだめだといつも思っていて、そのためにどうするのかということを、私はこの長野県だからこそ、是非プロジェクトの中に出していただきたいと思えます。

例えば、具体的に産業を興すと言っても、みんなにそんなのできないと言われて、そのとおりでないかと思いますが、それなら、例えば新エネルギーを作り出すことを産業にして、その産業を地域の人たちがやるというようなアイデアが出てこないのか。風力、水力、それから太陽光、あるいはバイオ、いろいろあると思います。そのほかに、新しい産業を考えた場合に、もうひとつどうしても考えなければいけないことは、実は水と空気を日本中に供給しているという観点です。私はすぐお金の話をするのでみんなに嫌われますが、要するに地域にお金が落ちなければだめでどうにもならない。そこに付加価値を付けていけない限り、私はなかなか難しいだろうと思います。

そういう意味からすると、長野県の内部でも、例えば長野市の30パーセントぐらいのところには多くの人は住んでいて、だいたいそこでは十分な生活ができています。しかし、長野市は70パーセントが中山間地域です。県全体では正確なことは分かりませんが、森林環境税を各県ごとにいろいろやっておられますが、私は端的にいうと森林環境税は、県レベルでやってもあまり意味がない。どうしてもやるならば、全国レベルで、あるいは場合によれば世界レベルでやりたいというくらいの気分です。少なくとも全国レベルでやっていくものと思います。

私は、やはり空気と水を供給するという発想でやっていくべきだろうと思っています。いずれにしても中山間地域をどう生かす、そこで生活が成り立つようにしていくということが、私は環境問題を考える上においても、非常に大きな、実は要因になっていくのではないかと、そう思っています。以上です。

(若林委員)

農業の立場から、今ご論議いただいていることは大変支援をいただいていると思っております。一人ですけど、全くそのとおりで、今お話が出ているように、今までの中山間地域というのは、やはり生きるための場所でした。しかし、こういう時代を迎えてきて、これからは生きるためというよりも、都会に集中した人たちが中山間地域へどう戻ってくるか、そういうためのひとつの場づくりのようなことができないのかなと思っています。

各論になって恐縮ですが、例えば、荒廃地の問題がよく言われますが、作物を作るという視点も大事ですけれども、もうひとつ環境という視点で、荒廃地の活用というものを考えるとすれば、田中前知事も言われたようですが、ただ余っているから植林をすればいいという理論ではなくて、もっとそのアメニティが享受できるような、そういう植林の仕方というのがあると思っていますし、今、鷺澤市長がおっしゃられたように、大方の中山間地域は水の資源を持っている。しかし、その水の資源も本当に安全なのかと言われると、有害鳥獣の問題も含めて課題があることも事実ですけど、もう少し手を加えれば、きちっとした安全な水の源泉になり得る、その施策というものがあると思っています一人であります。

そういう意味合いで中山間地域並びに山林の活用という部分に、もう少し長野県に力を入れてもらいたいと思いますし、特にその山林の部分では、山林を使って付加価値を高めるとというのが、今、主流になっておりますが、私どもは地元にいるだけに、加工する、付加価値を付けるということよりも、生のままで何とかなるような、そういうことのほうが環境に優しいと考えます。例えば、チップにしてストーブにたくという加工を考えるよりも、もっと効率的に、科学的に、もっと大きな木そのものをたくストーブのようなものが長野県で開発されれば、それは正に山の資源を活用するという道に最も近くなってくると思っていますところであります。

大変うれしかったものですから、少ししゃべらせてもらいましたが、その裏側にある部分は、少し飛んで恐縮でございますけれども、環境問題と一緒に出てくるのは、やはり私、健康問題だと思っています。今、見ていただいているところで、健康問題を取り上げていただいておりますが、むしろ環境と健康というものもやはり長野県のキャッチフレーズのトップに、持ってきてもいい課題ではないかと思っております。また後ほど、健康問題が出るかどうか分かりませんが、私は環境の次の部分では、健康問題の位置付けはもう少しグレードを上げるべきだと思います。それは、体の健康、心の健康という部分がメインであります。県議会議員の先生方がおっしゃられているように、そのほかにもみんな健康、健康なんだというところまでいってしまうと、なんとなくぼけてきてしまうと思っております、そんなふうを考えています。

(小宮山会長)

このあたりで整理をしてみたいと思いますが、環境問題、それから中山間地域を生き生きさせるという問題、それから健康も出てきましたが、ひとつはこの柱の順位立てといたしますか、これをもう少し長野県らしさという観点から強調できるところへ持ってきたらどうかというのがございます。

それからもうひとつ、これも、今日の資料3の44ページに、『テーマ』を設定して取り組むべき施策』とありますが、ここの考え方は、これを非常に重くとらえ、重点的にいく。先ほど池田委員からございましたように、こうした柱を横につなぐ、横糸にして、例えば環境でしたら、現在のこの柱でいけば、当然その健康でうんぬんするところに環境問題が入ってくる。それから産業のレベルでも、環境という視点の下で産業の振興を図る。それから、人づくりであっても、環境教育というような観点からここにも絡むというように、この環境ということは常に置いておこうと、常にこの視点を置いておこうというのが、こ

の44ページのこの『テーマ』を設定して取り組むべき施策」でございます。

ですから、先ほどの柱の順番を変えることと、それから『テーマ』を設定して取り組むべき施策」の中で、この環境を長野県として重点的に取り組むべきものとして入れるというやり方がございます。

環境それから中山間地域の問題がかなり重点的に挙がってきている。それから、健康が出てきていた。そういうようなとらえ方でいかがでしょうか。

(細川委員)

皆様のご意見、ごもっともと賛同いたしますけれども、その環境にしても、今おっしゃった産業、いろいろな環境が横軸にずっとありますから、一番トップにくるべきというご意見です。私は、環境も基本は教育、人づくりだと思います。子どもたちから、やはり環境問題を本当に教えるというか学ばなくてはならない。教えるのではなくて、子どもたちが学ぶべきだというのが私の考え方で、なんと言ってもすべての基本は人づくり、教育です。環境も、もとはといえば命ですから、その命というものがどれだけ大切かということも、やはり教育です。

そういうことを考えると、すべての基本は、子どもの子育て、人づくり、教育だというのが私の基本的な考え方です。例えば、めちゃくちゃな話かもしれませんが、こういう審議会、私たちはあと30年後に果たして元気で生きているかどうか、ちょっと危ないと思っております。

その、将来のことを考えたときに、やはり子どもたちの意見、子どもたちにこれからの長野をどうする、どんな長野にしたいのかということ子どもたちに考えさせるという視点が、すごく大事ではないかと思えます。この県民調査を拝見してますと、ほとんど大人の方です。今は学校で先生の言われたことをただただ学んで教えられる受け身の子どもたちをつくっているように思いますが、私でしたら、高校生又は中学生、小学生から、やりたいという委員を集めて、こういう審議会をつくって、そして自分たちで20年後、30年後の、このふるさと長野が、どんな長野になったらいいのかということ、しっかり考えさせる、意見を述べさせる。そしてその子たちは学校の代表だから、学校の子どもたちみんなに意見をだしさせて、自分が代表で県の審議会に出てくるというように、子どもたちが自分たちで考え、そして自分たちで意見を出しあっているものを取り上げ、これはああだこうだと議論をしながら、何かをまとめて県に提出するという、そういう場を与えることも教育、人づくりの大きなポイントではないかなと私は思います。

人づくり、すべての基本は教育だというのが、私の変わらぬ基本的な考えです。県のこの総合計画には、必ず人づくりが入っています。これはもうどこの県が作られても同じようなことは全部並べられて総花的にというお話がありますように、ならざるを得ないと思えますけれども、長野県はそうやって何をすることも、子どもたちの教育というものを常にその基本に置いて、すべてが行われている、考えられているというようなことを、表にはっきり分かるように打ち出していきたいというのが私の願いです。

(小宮山会長)

確かに、初回、2回目のこの審議会でも、長野県らしさを是非出したいという中で、こ



の環境の問題と、それから教育の問題、それから健康の問題等は挙がっていました。長野県は教育県というような背景もございますし、皆さん、そういうお考えをお持ちだったかと思いますが、いかがでしょうか。もちろん教育のことも、あるいは次のことでもよろしいのですが。

(池田委員)

14 ページの「産業の確立と地域間競争」のところですが、確かに産業の低迷というのは問題であって、その持続的な発展というのは重要だと思いますけれども、今のこの中身を見ますと、やや競争のところばかりが主張されているように思います。グローバルな競争に打ち勝とうとか、GDPを上げていこうとすれば当然環境は破壊されてくるというようなこともあるので、もちろんそういう大きな企業がグローバルの中で生き抜いていくということを支えていくのも重要ですけど、もっと小さな企業というんですか、ニッチ(Niche: すきま)であれローカルであれ、だれでもが、一人ひとりがそういった独自のユニークというか、個性のあるビジネスを地域で展開できることを支えるというようなニュアンスもないと、何でもかんでもグローバルに戦って勝たなくてはみたいな方向だけでは、さらに格差社会を進めるような側面ばかりが出てしまうのではないかという気が少しいたします。

(松下委員)

先ほどの私の発言で、最上位にそういったものを基本理念に据えるべきだとお話ししましたけれども、今の地域間競争のことにも関連しますが、産業振興や経済と対極にあるような環境とか景観とか伝統文化とか、そういったものをパラレルに並列に並べてやっても、これはだめなんですね。

先ほど、鷲澤さんのご発言の中で「新エネルギーを考えなければ」とありましたが、これは長野県においては非常に大事な要点だと思います。そのときに、もっと大事なことは、例えば風力発電ということ考えたときに、長野県のすばらしい、もう世界遺産にまでなろうとしている山のでっぺんで風力発電のために何十基もプロペラを回すというのが、本当に長野県らしいことなのかどうかという。ここに私のお話ししたような、どちらを上位に据えておくべきかということが絡んでくると思います。産業振興と経済優先、これは十分分かりすぎるほど分かりますけれども、やはりあえて戦略としてでもいいですから、こういったことを長野県は大事にしているということをキャッチフレーズにすべきだと思います。

これは、先ほどの教育の問題にも関わることだと思います。かつては、現在でもそうだとはいえますけれど、会長さんのいらっしゃる信州大学にも、全国からそういう長野県で学びたいという学生が集まってきているはずで、そして、すばらしい人材を育成してきている歴史が確かあると思います。ですから、そういったことを考えると、全国の若者のあこがれになるような県をめざすべきで、これからの時代は、産業振興とか経済活性化ということだけをうたっても、若者たちは長野県へ来ないと思います。

あるいは、子育て中の若い皆さんに、こんな信州だから、そこで子どもを育ててみませんかというようなキャッチフレーズをむしろ掲げるべきで、そうするとだんだんに人口も

増えたり、経済も見直されたりという形につながっていくのではないかと思います。

(鷺澤委員)

あえて申し上げますが、私は、先ほどから申し上げているように、総花的にならざるを得ないというのは、行政のある意味で仕組みだと思っています。そういう意味からすると、ここにご出席の皆さんのそれぞれのお立場で、ここが重点、こっちが重点とおっしゃるのも、それはまたそれでひとつの意見であります。私は、そういう中であって先ほどから話題になっていますけど、この環境というテーマを最上位に置くという考え方が、おそらく一番皆さんの合意が、今のところ得られるのではないかと思います。

例えば産業ですが、産業がしっかりしなければ、そういうものやっつけていくお金も生み出せないわけですから、これはもう絶対やらなければならないことだと思いますし、教育ももちろん非常に大事なことです。それぞれのお立場を強調されることは、それで結構ですけれども、43 ページのこの図ですが、非常にうまく総花的に書いてあると思うということにおいては、もうだいたい皆さん一致していると思います。

そういう意味からすると、この中で環境が一番最後にありますが、これをもう少し何とか考えたほうが、より長野県らしさが出てくるのではないかと思います。おそらくおっしゃられたのだろうし、私もそういう意味で賛成です。どれが大事だとか、それを順位付けるとするのは非常に困難です。逆にいうと、やるべきではないかもしれない。だから逆に言うと、ひとつだけ、これが長野の特徴だというものを出していくということが、私はいいのではないかと思います。以上です。

(伊藤委員)

今、お伺いしてひとつ気になったのは、産業振興というのが環境破壊を生んでいくというような構図というのは、確かに大きくあったかと思いますが、今、産業振興懇談会でも非常にすばらしい提言書が出され、県内のいろいろな企業の社長さんとお話をしていると、今の時代の中で企業経営を考える方ほど太陽光発電に対する関心が強かったり、それからエコ商品の開発に、またはエネルギーやエンジン開発について非常に技術を磨いていたりします。産業振興と環境を考えていくということは、これからは同じ問題なのではないかなととても感じております。

ですので、産業、力強い産業をつくっていくということは、上田の産業団地のように森の中に工場があったり、森の中で働いたり、そういった両立する形で長野県の中で、自然の中で働き、環境に配慮した技術力の高い、競争力の強い商品を世界に出していくということは、産業振興懇談会の提言から見ても決して不可能ではないのではないかなと感じます。そういう意識の中で、例えば諏訪湖の浄化ですとか、非常に日照時間の長い松本や佐久における太陽光のパネルの設置ですとか、いろいろな動きを企業が自己資金も出しながら支えていこうという動きはあるので、対立軸であり強く考えなくてもよいのではないかと思います。それゆえ、私はその環境というものを上に持ってくるのか、並列に持ってくるのかということころは、少し難しいところがあると思っています。私は東京でずっと働いたあと、東京は働く場もあり制度も整っていましたが、子どもを育て、本当に安心して自分の生活基盤をつくっていく上で、長野県に戻るという選択をして、ここで生きてきて、

そういう意味で環境というものは、生きていくところを経済と同じくらい支えていくものではないかなと強く感じますし、同時に働く人をどう支える、働く人の生活をどう支えるのかという労働環境の問題についても非常に強く、別のテーマになって恐縮ですが、今回の計画の中では打ち出させていただきたいと思います。環境と、それから産業振興と同時に、そこで働く人たちが、そういうものを押し進める中でうつになり、障害を抱えというようなことではなく、さまざまな立場の人が働く場で支えてもらえるというような、労働環境整備というものも強く中に入れていただきたいと思います。

(平尾委員)

私、今までの議論を聞いていますと、環境が最上位であるという考え方、これはたぶんだれも否定しないだろうと思います。若干私が違和感を感じるのは、やはり産業と環境、生活と環境、地域づくりと環境、中山間地域と環境ということは、今の伊藤さんの話のとおり対立軸で考える時代ではもうなくなっていると思います。

それで、それぞれの企業、長野県の企業は99パーセントが中小企業ですから、この中小企業で支えられている8兆円の経済規模を維持しなければ、長野県の220万県民は生きていけない。220万県民が生きていけない状況をつくれれば、たぶん遠藤先生のおっしゃったように、真っ暗な長野県はかなり早く生まれるかもしれない。やはり基本的には、そこに人が住んで豊かな生活をして、そのバックには所得がないと豊かな生活もできない、そこに人が住めない。したがって、豊かな人材育成もできないという構造の中で、これからどう計画を組み上げていくのかということを経験しなければいけないと思います。

そのときに環境が上位で、ほかのものを制約条件として設定するのか、あるいはそういう認識で長野県が考えているのかということ自体が、私はちょっと遅れているのではないかという気がします。むしろ、その産業の競争力を高めるためには、もう環境なくして競争力はもう維持できないわけです。人づくりの問題にしても、環境教育なくして人づくりなんてできないわけですから、ある意味で長野県というのは、環境を内在的な要因として、さらにその中で強い人間をつくり、強い産業をつくり、豊かな所得をつくっていくためにはどうしたらいいかという視点を持たないといけない。相変わらず環境が上位にあって、それが制約要因のようにしてその枠の中で考えるという発想を捨てていくところから、豊かな長野県と環境をすべてに内在化したような姿が描けるのではないかという気がします。やはり対立軸は捨てないと私はまずいのではないかなと思います。

そこで、競争するということは、決して価格競争や下請けいじめというイメージではなくて、むしろ環境に対する競争というのが、これからものすごい大きな競争力を持つ時代になっている。環境問題をやっている方は、現場の製造業の方々が、どのくらい環境に配慮してものづくりをしているかということについて、若干認識を不足しているのではないかなと、私はそんなふうに思っています。

ですからそれぞれの環境要因というのをこの上位概念として置くということについては、私は若干違和感を持っております。そういうことではなくて、それぞれの内的な要因として、それぞれをうまく組み込んでいく、たぶんその知恵をどうやって出して、その戦略をどうやってここで提示していくかということを経験を、むしろ議論していくべきであって、上位であるか下位であるかという議論をすべきではないと私は思いますが、そのへんはいかが

でしょうか。

(花岡専門委員)

若干意見を申し上げさせていただきたいんですが。

今の平尾委員の発言、私は賛成です。もう対立概念で議論する時代ではないと思っております、私はその意見に賛成です。しかし、環境問題が重要であるということは、皆さん方のご意見のとおりで、私も全く同感でありまして、そういう面では基本目標というものの中に長野県らしさをですね、そういうものを提示をしていくとか、あるいはまた 44 ページの「テーマのイメージ」というところで、「環境」と書いてありますが、こういうテーマを冒頭に環境問題といいますか、地球温暖化対策というか、そういうものを取り上げる等の方法で特色を示していきけるのではないかなと思います。

それから、少し違いますがいくつかお願いしたいと思います。ひとつは冒頭 2 ページの「計画の趣旨、性格」ということですが、今回議論している総合計画は、具体的な県の基本施策、方向を示すということはそのとおりで問題ないと思いますが、そうした中でも県の具体的な施策について数値目標等を定めて提示をしていくと、そういう理解を私はしております、それを県民の皆さんに提示したときに、方向性も分かるし、具体的な事業もイメージできるという意味で大切なことだと思いますが、そういう部分をこの計画の性格というところで、明確に示されたほうがいいのではないかなというの一点。

それから、二点目はですね、潮流、特に 10 ページ、11 ページですが、「地方分権の進展」、そしてまた「財政状況」ということでありますけれども、地方分権の進展というのは大変結構な話でバラ色な面もありますが、基本的にはこのところにも書いてありますが、自己責任ということで表示はされていますが、基本認識として、もう一度この計画の策定に向けて、私は長野県として整理をしていただきたいと思います。分権の推進のためには何としても県が自己責任で財源を確保するということが、今まで以上に重要になってくる。そこで、地域の特色、歳出の面で何をやるかというようなことも、もちろん大事なことです、それよりも先に大事なことは分権の時代では県が主体的に財源確保をどうするか。入(いる)を図って出(いずる)を制するのが行政ですので、当然のことですが、その部分の認識が、この特に(7)、そしてまた(8)の「財政状況」を見たところで、県が主体的に行政を行うためには、財源を確保していく、これが何としても一番重要だということをもう少し明確にしてほしい。当たり前のことですが、それは今までも重要だったんですが、今までは地方交付税によって国が、大きくいえば面倒をみてくれたものですから、そんなに財源が確保できなくても一定の行政水準を確保できたわけです。一挙にそうなるというわけではありませんけれども、地方交付税が漸減されるという状況の中では、正に時代の潮流の、私は大きな流れかなと思います。そこで、その部分を(7)ないし(8)のところで明確にして、仕事をするためには財源が必要なんだ、財源確保が何よりも大事なんだと、それで県民の行政需要に応えられるんだということを計画の中では明確にしていく必要があるのではないかなと思っております。以上です。

(鷲澤委員)

先ほどの平尾さんのご意見について、私は対立軸をつくるという考え方そのものは反対

です。だから、対立軸をつくる必要性は全くないわけで、ただし私は、少なくともこの計画そのものに、私は大きな意味での目標をつくるとすれば、やはりどう見てもこの中では環境だろうなと思います。環境を中心にしたものの考え方は、ベース的なものにして入れればいいんだという考え方なら、それはそれでも結構です。ただ、対立軸でやっているとか、そんなものでは絶対ないと、それだけは申し上げておきます。以上です。

(平尾委員)

私が申し上げたのは、その上位とか下位とかいう、序列をつくるということについての違和感という話を申し上げたんで。

(鷺澤委員)

ひとつだけ上位をつくるぐらいのことについては私は賛成をしたいという、私はそういう意見です。

(平尾委員)

そうすると、私は若干それとは異なります。むしろ、それは内在するものであって、その内在する姿を長野県なりの環境問題として認識をした上で、計画を組み上げていけば、私は必ずしもその環境ですべて制約される、制約されるってこと自体が対立の概念というイメージになりやすいんですけども、そうでないようにして。

(鷺澤委員)

私は、それはどちらでもいいと言っているんです。要は、言葉の遊びになっているんです。内在しているものとしてベースにあって、それをいくつかのテーマの上に持っていくのか、あるいは上位計画に入れてやるのか、それは同じことなんです。それは、どちらでも私は構いません。ただ、どちらかというところ、この中で挙げるという中でいくと、私はこの部分が一番重要ですねということだけは申し上げておきます。以上です。

(有吉委員)

私も、言葉の問題かもしれないと思いますが、私も今まで申し上げてきましたが、長野県の一番のよさというのは、その自然環境、いろいろな環境がありますけれども、自然環境が財産だと思います。人間は地球に生かされている生物のひとつなわけですね、ところが今、人間がその自然環境を操作しようとして、そしてそのしっぺ返しとして、温暖化の問題が出てきているということで、そこをやはりクローズアップして、長野県は自然を大切に、自然と仲良くやっていくということを、やはり全面的に出して県民の意識としてやっていく必要があると考えております。

(滝澤委員)

私も今の議論を聞いていて思ったのは、環境とほかの問題を対立的に考えるのは、やはり間違いだと思います。ただし、この施策、今回のこのものが県民に分かりやすく、かつアピールできるかという観点で考えたときに、ひとつの上位概念として、環境というのは

トータルなものとしてまず位置付けるというのは、意味があるのではないかなと思います。ただそれは、いろいろな産業発展を制約するとか、そういう意味ではなくて、人材育成にしろ産業にしろ、その環境というひとつのものが、てこになって、ある意味ではコーディネーター的な位置付けを持って動くというような位置付けでこの提案がなされていけば、非常に新しいものができるのではないかなと感じます。

(池田委員)

やはり、外向けにどういうふうな形としてアピールしていくかということも重要なので、やはり何かをこうメインに出していくというほうが分かりやすい。それと、皆さんがおっしゃっているように、もう公害の時代ではないわけですから、いわゆる対立軸というのはだれが考えても今の時代あり得ない。それを並列に置いた場合には、今、長野が抱えている環境リスクというものが見えにくくなるという側面もあると思うんですね。例えば諏訪湖が汚い、クマを500頭殺しているとかですね、そこら中にごみの埋立処分場があるとか水源が危ないとか、今、内在しているいろいろな環境問題をしっかりと、ここの中の課題では明示的にあまり出てきてはいませんが、それを踏まえた上で、先ほど鷺澤委員さんがおっしゃったように、全国の水と空気を私たちは長野県民として守ってあげているんだというぐらいの気概を、外にアピールしていくところが、やはり見た目的にも非常にインパクトがあるというような感じはいたします。

(小宮山会長)

先ほどから44ページのこのテーマを設定して、ここで長野県らしさを出していこうではないかということですのですべての施策の柱にそういう精神を反映させていくという趣旨から、環境というのがここに挙がっていました。それから、健康のことが先ほど挙がっていました。さらに人材育成、教育が出ておりました。あまり多くなって、少し散漫になってもとは思いますが、このあたりどうでしょうか。ご意見をいただけたらと思いますが、平尾委員。

(平尾委員)

私が先ほど上位という言葉に違和感を感ずるというようなことを申し上げましたが、その意図するところが、例えば横軸というような意味で、あらゆるものに横断的に、ひとつの要素をして考えるべきものであるということであるのであれば、環境問題が重要であるということは、これはもうだれが見ても明らかなことだと思います。それはあえて議論する必要もないぐらいのことであって、例えば私が思い浮かべる姿というのは、環境問題に対する企業が非常に競争力があるということを考えて場合に、例えばトヨタのプリウスのエンジン部品を作っている会社が、今、非常に元気がいいとか、あるいはエンジンの中に非常に的確に噴射するノズルで、ガソリンの噴射の量を少なくして一定のエネルギーをそこから抽出することができる、そういう部品を作っている会社が非常に競争力があるとか、そういう長野県的なものづくりというのは、環境問題をベースに考えればいくらでも出てくるわけです。

環境問題がベースにあるから、当然豊かな自然環境で生活しやすい、豊かな、ゆとりの

ある生活もそこで維持できるだろうし、そういう中で育った子どもたちはたぶん感性の豊かな子どもが育ってくるだろうとか、それはもう当然横軸ということでは、これは一番本当の意味でのベーシックなものだろうと思うんですね。だから、環境問題をベースとして上位というような形で取り出すというよりも、長野県の環境がこういう分野ではこういうふうな姿を描いてみるとか、こういう産業の分野ではこういう環境を組み込んでみるとか、逆にそれぞれの柱の中で、その環境がどういうふうに長野県の場合、それぞれの柱の姿に、他県とは違う姿が描けるのかというように、中にこう盛っておいたほうが、私は分かりやすくなるのではないかなという気がいたします。

私が申し上げているのは、そういう意味合いです。

(小宮山会長)

先ほどのキャッチフレーズ的な部分、あれは事務局でまとめていただいたんですけども、このあたりも含めてですね、何かご意見をいただけたらと思います。

(鷺澤委員)

最後のほう、39ページ、40ページあたりでしたか、いろいろな地域の広がりとか、交流の広がり、地域の推進という問題ですが、実はこれ、長野県という立場と市町村という立場とですね、どちらがどういうことをやるということが、現在、非常に私はあいまいになっていると思います。それはなるべく県でやっていただければ市町村はありがたいという話になるんですけども、逆に言うと、県にコミュニティのようなどころまでいろいろ突っつき出されると、正直言うと市町村がまいてしまうという部分も実はあります。

ですからこれは、どっちにしても県と市町村の役割分担というもの、あるいはその間に広域連合というものがありますが、こういうものとの間の役割分担というものは、なるべくきちんとしたほうがいいのではないかと、私はそう思っています。

(松下委員)

今のお話、全く賛成です。その役割分担をする上にもですね、やはり長野県、言い方は信州とか信濃とかありますけども、その上の空に、青い色の雲がかかっているのか、あるいはピンクなのか、あるいはグリーンなのかという、そういうものがやはり一番、大事だと思うんです。そして、あとはそれぞれの市町村が地域性を生かして、どういう役割を帯びていくか。あるいは、もっと言えば、例えばピンクの色の県だったら産業はどうあるべき、あるいは教育はどうあるべき、観光はどうあるべき、というような形に、少し考えやすくなると思います。ですから、今回の中期ビジョンというか、基本構想ですか、これはやはり何色の雲を長野県の上に乗せるのかというあたりを、先ほど何を上位にという、私の発言がきっかけになってしまいましたが、そんなふうに考えていただくと分かりやすいのかなと思います。

(近藤委員)

先ほど鷺澤さんもおっしゃいましたが、どうしても自分が出ている立場を何とか中期総合計画に入れたいという発想になりがちですが、今、皆さんの話を聞いていますと、私は、

先ほど鷺澤委員が発言された中山間地域の問題は、非常に大きいと思っています。連合でも地域協議会というのがありまして、いろいろ直面すると、やはり働く場だとか、そういうものがなくなっていく。

長野大学の長野先生ですか、限界集落、つまり集落として成り立たないというのが、これから増えていくだろうというのがあるものですから、当然そのこともしっかり視野に入れながら、先ほどからいろいろなお話がございませうけれども、環境というのがひとつ貫かれている中で、生活をしていく上で一番大事なものは何かというときに、やはり私どもとすれば、働く場、あるいは伊藤さんもおっしゃったように、働きやすい、あるいは暮らしやすい長野県をつくるということです。成長力の問題を含めてですね。

国でも労働局を中心に、いろいろな会議などにもこれから出ていきますが、長野県は高齢者の就業率や女性の就業率を含めて高い。そういうよいところをより伸ばしていく、そういうものと環境をうまく組み合わせるといったところが、私自身は非常に重要だと思っています。それから、人が住まなければ土地は荒れるわけで、そこに住んで本当に安心して生活できる、そして家族みんなが仲良く暮らせるような、やや抽象的ですけども、やはりそういうものを、私は労働組合という代表の立場ですけども、是非そのへんを中期計画の中でも、大事にしてほしいと思っています。

(小宮山会長)

この中山間地域の問題、これは本当に重要だと思います。北原委員、何かこれに関して。

(北原専門委員)

実は私も、それは一番大きな問題だと思います。鷺澤委員がご指摘いただいたように、全国的にみてもそうですけれども、一番深刻な問題だと思います。

あと10年か20年ぐらいですとですね、廃村が相次ぐということになりかねないと思うんです。そこで、このまま長野県が何の施策もしない、あるいは現在のまま何もしなければ、そういう状況になっていくのは間違いないと思います。いかに中山間地域を盛り上げていくかということに関しては、とにかくこれも鷺澤委員がご指摘されていたと思いますが、とにかく産業です。中山間地域ならではの産業を育てていくということ、それに尽きると思います。ただ、それがなかなか難しい。経済効率から考えても、難しいということになってしまいます。

ですから私はそのへんで、今非常に悩んでいるところです。明快な答えは、私は持っていません。

(伊藤委員)

ちょっと違う視点で申し訳ないのですが、施策体系の①に「健康で長生きできる」というところがあります。詳細の項目の中には書かれているわけですが、子どもを産み、それから育てる、安心して女性が子どもを産み、男性とともに育てていけるという子育てや、女性が働きながら子どもを育てていくというのが、これから増えていく。ですので、先ほど近藤委員もおっしゃったような働く場へ女性の視点をもっと入れていく。それから、本当に安心して産み育て、健康で長生きできるというような、単に高齢化にしておくだけで



はなく、子どもたちを産む環境、それから育てる環境についても、明確にここに言葉として出していただきたいと思います。

(遠藤専門委員)

そういう意味では、長野県というのは、何度も申し上げているように非常に教育県で、県民一人ひとりの意識、学問に対する意識が極めて高い。そういう中で、もっと県民にいろいろな意味での環境教育を徹底すると、まず公害を出すような企業はここには入れなくなりますし、そういう公害を出さない、あるいは環境マインドを盛り込んだ商品が出ていく、そういう地域ができていくと思います。

そういう中で、学校教育だって、長野は地域が教育をつくり出しているところがあります。決して、学校だけに任せておく教育ではなくて、田舎へ行けば行くほど、おじいちゃん、おばあちゃんも学校の教育に一言言う。あるいは、おじいちゃん、おばあちゃんの参観日がある。こういう中で、地域が学校教育に参画している。そういった長野県が持っている、信州が持っている独特の社会性、これは長野県のひとつの財産です。

そういう中で、お年寄りもしっかり働いているし、ご婦人もしっかり働いている。そういう意味では一家の可処分所得も意外と高い。そして、そういう皆さんにも、適当にうまい形で雇用機会が提供されている。非常に豊かな田舎というか、非常に学問意識の高い、文化の風の高い田舎、これがひとつ目指す方向であり、もともと長野県が持っている背景だと思えます。

そういう中で、今、伊藤委員がおっしゃったように、インフラの整備というのは、また経済力を生み出す部分もあるわけですから、ベビーシッターのシステムだとか保育園だとか、こういうものを整備し女性をもっと働きやすい環境をつくる。それから、高齢者も働きやすい環境をつくる。あるいは、そういう雇用を促進するようなほうに、もう少し税金を回していただければ、これも含めていろいろな意味での環境だと思うんです。産業的立場からいえば、今は、これは常識でして、石油や電力をたくさんインプットしなくても、GDPはいくらも増やせる時代になりましたので、経済力を高めることと、それから環境が相反するという事は、もう基本的にはあり得ない。そういうことはない時代になりましたので、そこだけはちょっと頭に入れておいていただきたいと思います。

(松下委員)

私は建築家としてですね、長野県の土木建設産業については、今まで細かくは語られていませんので、一言触れておきたいと思います。

これからの時代は、建設産業もどこかで少し方向をシフトしていかざるを得なくなる。やはり持続可能な社会にマッチングした建設産業が求められる。つまり、どんどんどんどん右肩上がりの時代は、道であれ橋であれ、建物であれ新しいものをつくるそういう時代でした。

しかし、これからの土木建設の方向は、少しそれを修復したり、手直しをしたりするほうへも少し目を向けていかなければいけない時代になっています。ここに、先ほどから出ています環境の問題しかり、それから森林の問題もしかり、すべてが関わってきます。ですから、その視点を少しどこかに入れていただきたい。長野県の建設産業のこれからの方

向性を、少しうたっておく必要があると思っております。

(平尾委員)

先ほどの中山間地域の問題というのは、たぶんその生産とか、その住まい方とか、あるいは治山治水とか、環境問題も含めていろいろな問題集約していることだと思います。だからなかなか一つの切り口では切れないという部分もあると思います。

ですから例えば、そういうものに対して、長野県なりの一つのモデルをつくって提示するということは、今回の基本計画の中でも、私は非常に重要な部分を持つのではないかと考えています。では、そのモデルとは何かというと、これは前回も触れたかどうか忘れてしまいましたが、例えば、林野庁が音頭を取っている森林セラピー。これは若林委員もおっしゃっていましたか、セラピーというのがあって、全国で10か所を指定しているうち、長野県には5か所あって、そういうセラピー基地なんかを作って、そこに多くの人に来てもらう。

で、やはり地域に人が住むには、その地域で所得を生まなければいけないわけで、そのためには農産物を作るか、ものづくりをするか、あるいは人に来てもらう。そのことによって所得を確保した上で、そこに人に住んでもらうという構造は、どうしてもつくらなければいけない。

そうすると、やはり農産物で生きていくというのは、今の時代なかなか難しい。では、山深い、その森林の中に工場を造るかということ、そんなことはとんでもないとなる。人に来てもらう工夫をいかにやれるかという話になりますと、先ほどの森林セラピーのようにこれからの都市圏の団塊の世代をにらんだような癒しのエリアを、環境問題とセットで提供するような仕掛けをいかにつくれるかということになります。

例えばドイツでは、いろいろな療法を提供する小さな村がありまして、森林に囲まれた1万人くらいの村でクナイプ療法という19世紀からやっている療法を提供をして、あなたはこういう状況だから、だいたい2週間コースでこの森林の中を歩きなさいとか、あるいは水療法でやりなさいとか、そういう一定の療法があって、そこに1か月も滞在するような人もいます。その人口1万人の村に年間どのくらいの人があるかということ、100万人が来るという。ですから、そういう工夫をいかに長野県の中で提示していくか。そのときの人材をどうやって作り出していくか。先ほど私が申し上げた、それぞれの分野には必ず環境問題がもう内在的にあるというのは、そういうものを知恵を絞って提示していき、あるいは人がそこを支える、あるいは行政がそういう指向でそれをリードしていく、それが基本計画の中に埋め込まれている姿が、やはりほしい。それによって、中山間地域の問題というのは、すべて解決するとは言いませんけれども、かなりの部分をカバーできる可能性はあるのではないかと。少なくとも可能性があるのだったら、そういう方向に向かって知恵を絞り、癒されたい人がますます増えるという状況の中で長野県の特徴を出していくこともできるのではないかなと思います。そういう具体的な環境と産業、あるいは環境と住まい方、環境と人づくりというものを、具体的な焦点を結ぶような形で提示をしていかないと、環境がそれは大事だということは、もうだれもが認める話なんです、そこから一歩も前になくなってしまいう可能性があって、どうもそういう議論というのはあまり生産的でないなということを、先ほどからちょっと考えておりました。

(鷺澤委員)

さらに今の発言に加えたい部分というのは、この中山間地域をどうするかということは、実はもう長年のテーマです。常に頭にあるのは、やはり農業をどうする、林業をどうするかという話なんです。確かにこれだけではとてもだめなので、どうするかというと、やはり、農業もやり林業もやり、なおかつ観光もその中に入れていく。そして、医療という、今も、そんなにすごいのがあるのかなと思って、お聞きしましたが、そういうようなもの。あるいは、エネルギー産業の中に、例えばバイオとか水力とか風力とかというのは、これはもう正に中山間地域のほうが、たぶんできるだろうと思うんですね。

それから、食料の問題では、地産地消ということが最近かなり出てきてはいるんですが、問題は、今、それをやる気力のある人が地域にいない。もう、いなくなってしまった。だから、そこを何とかしていかないと、生活費を保護するというわけにはいかない。現実には、そこに住む人に気力があって「よし、やっていこう」という人がいなくなって、難しいなというふうになっている。だから、そこをどうするか。やっぱり趣味的、もちろんボランティアでいろいろなことをやっていただく、あるいはいろいろな趣味的なことで、いろいろと取組をやったりというのも大事だと思います。そういうものは、今、観光地などでは語り部をつくれと、私も日ごろ言っている。いわゆる山の案内みたいなものとか、そういうような職業は必要だとは思いますが、それだけではうまくいかない。

そこで、必要なことというのはやはり、ある程度行政がきっかけだけは作らないと。限界集落の話も出ましたけども、もうここまでできてしまっていると、今必要なのは、本当にどうするんだということ、それぞれの村ごとに診断をして、時にこれだけ行政でもお金を出すのでなんとかしようという、そういうムードではないでしょうか。どうも、そんな気がして仕方がありません。

(小宮山会長)

かなり具体的な、この施策に向けての貴重なご提言だったと思います。

時間がそろそろきてしまいましたが、一応ここでもよろしいでしょうか。本日の会の最初のころに、遠藤委員からのご発言がありましたように、潮流は潮流として、その先を我々は読んでいく、そういう姿勢も非常に大事なんだなということも、心に留めておきたいと思います。

よろしいでしょうか。それでは。今日はおかげさまで、かなり方向性が見えてきた感じがいたします。今日ご審議いただいた内容をベースにして、また論点整理をさらに進めてみたいと思います。

それで、次回は計画の大綱について、一応たたき台をご提示させていただいて、そこでまたご審議をいただくということにいたします。今日のご意見を、いろんな形で生かしていきたいと思います。それでよろしいでしょうか。

ありがとうございました。

それでは、次に、地域懇談会の開催について、事務局から説明をお願いしたいと思います。

(岩崎企画課長)

(資料6に基づき説明)

(小宮山会長)

この地域懇談会についてはよろしいでしょうか。ご説明のように、地域総合計画に反映させる部分と、それから地域の特性の一端も是非ここで把握していただけたらと思います。

それでは、ご多忙とは思いますが、ここへの出席もよろしく願います。

次に、長野県中期総合計画(仮称)の着実な推進を図るために、この案がございますが、これについてもご説明いただけますでしょうか。

(原山政策評価課長)

(資料7に基づき説明)

(小宮山会長)

この件について何かご質問は、よろしいでしょうか。

それでは、ご説明のとおり、これから行ってまいりたいと思います。

次に、その他でございますが、次回の審議会の開催日程等について、事務局から説明いただきたいと思っております。

(佐藤企画幹)

次回の開催日程につきましてですが、前回の審議会におきまして6月14日木曜日、午前10時から県庁の本館3階、前回、前々回の会場でございますが、特別会議室で開催するよう決定されておりますので、よろしく願います。

(小宮山会長)

6月14日ということですが、ご多忙とは存じますが、よろしく願います。この件は、よろしいでしょうか。

それでは、今日用意したのは以上でございますが、何かございますでしょうか。特にないようですので、今日は、本当にありがとうございました。また次回よろしく願います。